

郷土資料館だより

Vol.43 No.2
2020.11.1

企画展「浮世絵でたどる東海道五十三次と四つ辻のまち三島」報告

- 開催期間 前期 令和2年4月18日(土)、5月23日(土)～6月28日(日)
後期 8月1日(土)～8月30日(日) ●展示資料数 59点
- 入場者数 前期 2,422人 後期 5,700人 合計8,122人

コロナ禍による臨時休館(4/19～5/22)があったため、期間を変更して開催しました。展示の中心は広重の浮世絵の復刻版である「保永堂版『東海道五拾三次』絵巻」(トッパン・フォームズ社制作)です。広重の描いた55枚の浮世絵を一気にご覧いただくことで、江戸時代の旅を感じていただきました。



企画展「三島宿のジオと歴史—写真とマンガで見る—」報告

- 開催期間 令和2年7月11日(土)～7月26日(日)
- 展示資料数 45点 ●入場者数 4,139人

三島宿の歴史とジオパークの見どころを合わせて紹介する企画展を静岡県地学会東部支部と共に実施しました。展示期間中は地学会会員・サポート会員数名が常時展示室に詰め、来館者からの質問に答えており、多くの来館者が熱心に説明を聞いていました。また、展示室中央に「ジオ生け花」を展示しており、通常の企画展とは異なる趣向が来館者の関心を引いていました。期間中は小浜池の水位が2m程度まで上がっていったこともあり、多くの来館者が訪れました。



企画展「三島を襲った災害と復興」開催

- 開催期間 令和2年10月31日(土)～令和3年2月28日(日)
- 会場 郷土資料館1階企画展示室

甚大な被害をもたらした東日本大震災から、早10年近くが経とうとしています。未だ東北の復興が道半ばの現在、南海トラフ地震の発生確率が高まっているとの報告もあり、また近年は大型台風や豪雨の影響による大規模な洪水が立て続けに起こるなど、災害への不安は人々の間で高まっているのではないのでしょうか。

これまで日本は何度も大きな災害に見舞われ、被害に遭ってきた一方、治水をはじめとする災害対策や復興事業により、少しずつではありますが災害への備えは強くなってきています。

今回の企画展では、三島及び北伊豆地域を襲った災害やそこからの復興を、古文書や古写真などで紹介します。この展示が、改めて災害への備えを考えるきっかけとなれば幸いです。

次ページでは、展示内容の一部をご紹介します。



●北伊豆地震による被害とその復興事業

大正12年(1923)に起った関東大震災は首都圏を中心に未曾有の大惨事となりました。これ以降耐震建築について関心が高まり、翌年に改正された市街地建築物法(建築基準法の前身)では初めて耐震についての規定が設けられました。この震災では現在の三島市域(当時は三島町・北上村・錦田村・中郷村)でも死者4名(三島町2名、北上村2名)、負傷者32名、建物全半壊計342棟の被害があり、修復の際には支柱や筋違を増やすなど、従来より耐震を意識する動きがありました。

関東大震災の7年後、昭和5年(1930)11月26日に起った北伊豆地震は、丹那断層などの活動による直下型地震で、北伊豆一円に甚大な被害をもたらしました。三島市域も死者25人、家屋全半壊及び埋没3021棟という大惨事でした。絵葉書などからも、その被害の大きさがわかります(写真1)。

この時、関東大震災以降に行われた耐震補強工事が被害を軽減した例がいくつかありました(註1)。大場にあった駿河銀行大場支店(現在スルガ銀行大場出張所)では、関東大震災後の修復で1階に筋違を入れて

あったため全体の倒壊は免れたものの、一部筋違を施していなかった部分が被害を受けたため変形してしまいました。三島第一尋常小学校(中央町、現南小)では、建物を外側から支える支柱を設けていたため倒壊は免れました。成真寺(大社町)境内にあった三島共立家政女学校では、2棟あった校舎のうち1棟は壁面や瓦の落下など被害を受けましたが、もう1棟はほぼ無傷でした。これは、無傷だった校舎は前年に2階を増築した際、建物四隅をL字型の金属製の添柱で補強していたからでした。

また、木造建築に対して鉄骨や鉄筋のコンクリート造の建物の被害は軽微であったと報告されています。現在の三島中央町郵便局(中央町5-5)の向かいに建っていた三十五銀行は、周辺家屋がいずれも大被害を受けるなかほぼ無傷で、鉄骨鉄筋コンクリート造の耐震性の高さを証明していると評されています。

耐震構造の有無が被害を大きく左右することがわかり、おそらく人々の間でも耐震性の向上に対して意識が高まったものと考えられます。静岡県は大場郵便局内に耐震建築相談所を設けました。「耐震建築相談所要項」(写真3)によれば、これは建物の耐震構造について専門家から助言が受けられる制度で、震災で大きな被害を受けた北伊豆の各村を巡回する出張相談も行われました。相談を呼びかけるチラシ(写真4)によれば、申込は町村役場を通じて行い、その後相談所主任が建築現場に出張して相談に応じてくれるというものでした。相談所主任の岩淵丙馬は耐震建築を学んだ設計技師で、北上村役場や市内の公立小学校などの耐震化や二日町に新築された新興青年会館、壺町田公会堂、新興生活館などの建築に関わりました。

青年会館や新興生活館とはどのような施設だったのでしょうか。県は復興にあたって「精神復興」と



写真1：北伊豆震災の被害(現在の中央町付近)



写真2：復興後の大通り(写真1と近い場所) 関守敏氏蔵

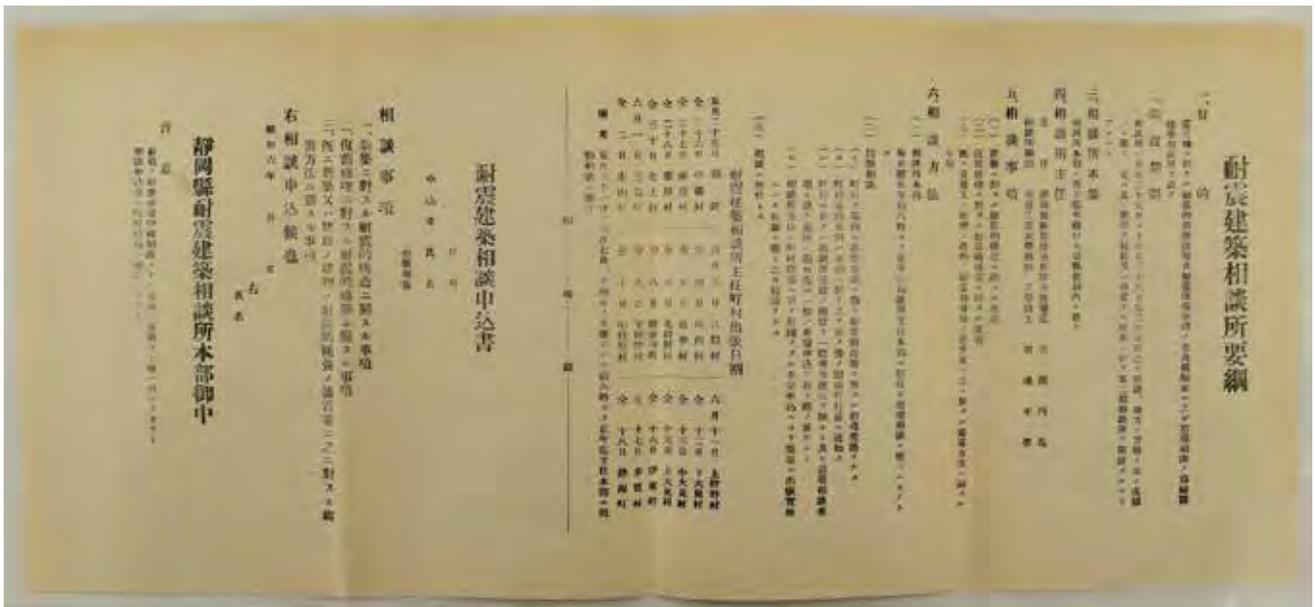


写真3：耐震建築相談所要項

「産業復興」を重視しており、精神面での復興を支えるものとして建設が奨励されたのが新興生活館でした(註2)。静岡県社会課が作成した『新興生活館事業成績』(昭和10年)によれば、想定される機能として冠婚葬祭改善、生活改善共同設備、服装改良、農繁期託児所、妊産婦相談所などがあげられており、地域の生活全体の向上のための施設と位置付けられます。昭和9年度にはすでに県下103か所に設置されており、三島では昭和7年度に田町、芝町、二日町、壺町田に建てられました。経営主体はそれぞれ田町青年会、芝区、二日町青年会、壺町田区、岩淵丙馬が設計に関わった二日町の青年会館は、二日町新興生活館のことだと考えられます。田町と芝町の同館については活動内容が記録されており、地域の寄合や手芸や料理の講習会、「子供慰安会」などが行われています。

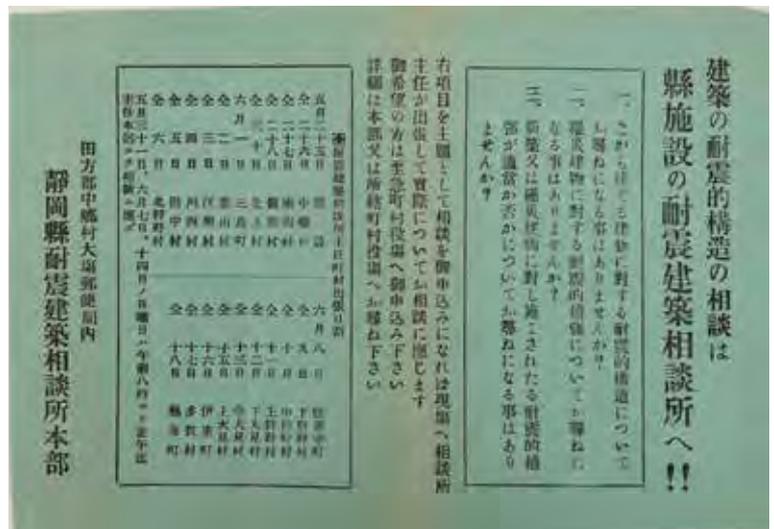


写真4：相談をよびかけるチラシ

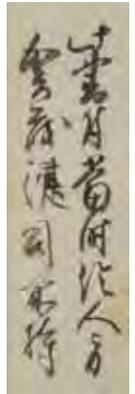
建物の耐震化や新たな施設の建設のほか、北伊豆震災からの復興過程で最も大きな変化といえば、道路の拡幅があげられます。江戸時代の宿場町の面影を残していた東海道と下田街道(現在の旧下田街道)は、それぞれ3間3尺(約6メートル)・2間3尺(約4メートル)から、15メートル・11メートルへと拡幅されました。当初は反対が多かったものの、最終的には沿道の住民が道路沿いの敷地を一部無償提供することで可能になったそうです。こうして現在の道幅となった東海道及び下田街道には、モダンなデザインの商店が立ち並び、近代的な雰囲気に生まれ変わりました(写真2)。主に店の表側を板金やモルタルで覆う建物は、関東大震災以降に見られるようになったスタイルです。これらは店の表側だけに装飾を施すことから後に「看板建築」と呼ばれるようになりました。現在も市内中心部には当時の看板建築がいくつか残っています。

註1：『建築雑誌』542号(昭和6年発行)／註2：『静岡県史通史篇6近現代2』(平成9年発行、静岡県)

三嶋大社の古文書をよむ 第11回

◆これって古文書？～影写文書「戦国期の三嶋社神主盛和の判物」～

今回も戦国時代の古文書を紹介しします。宮司家の矢田部家所蔵の古文書です。輪郭線しか書かれていない変な文書ですね。これは古文書の上に紙を乗せ、文字の輪郭を写したもので「影写文書」といいます。撮影や複写ができない時代に行われた、古文書を写し取る方法で、通常は中を塗りつぶして、実物の古文書そっくりに仕上げます。原文書に近い情報が写し込まれるため、実際の字体と関わりなく筆写した「写」や「謄写本」に比べて、重視されています。



では、写真の古文書です。差出人の神主盛和は、宮司矢田部家の系図から、戦国期の大社神主。通常発給文書(差し出す書簡)は、相手の側に残りますから、この古文書原本は大社にありません。文面冒頭に「鶴岡」の文字。宛先は賀茂惣兵衛と賀茂左衛門尉。右端上部の裏側(端裏)に「此書付当時伶人方賀茂健司所持」と書かれています。この文書は鎌倉にある鶴岡八幡宮の伶人(雅楽を奏する奉仕者)の家、加茂(賀茂)氏所蔵の古文書のようにです。

天正4丙子年4月22日付 神主盛和判物 端裏書拡大

江戸時代後期の地誌『新編相模国風土記稿』(天保12年(1841)完成)によると、○鶴岡八幡宮の伶人組織は、鎌倉時代に必要に応じて京都から奉仕に来てもらっていたなかから、鎌倉に常住する者が出て整備された。○鎌倉幕府の滅亡以後、戦乱にたびたび巻き込まれ、加茂餘三朝末という者のみが奉仕者として残り、天正年中に四家に分家した。それが加茂出雲守・加茂周防守・加茂惣兵衛・加茂対馬守。

〔端裏書〕
「此書付当時伶人方賀茂健司所持」
鶴岡伶人、来たる十一月御神事より、三人毎年祇候有るべく候、引物之儀、相計い渡すべく候者也、仍って件の如し、
天正四丙子年
四月廿二日
賀茂惣兵衛殿
同左衛門尉殿
神主盛和(花押)

○その後さらに八家となり、江戸後期の時点で、加茂将曹和蔭(加茂周防守の末裔)・加茂健司龍起(加茂出雲守の末裔)・加茂文司定英(加茂対馬守の末裔)・池田隼人良成(加茂惣兵衛の末裔)・加茂伊織兼良・大石丹司勝義・辻右近兼隆・多修理以時がいた。

○江戸後期の時点で、鶴岡八幡宮の伶人が三嶋大社の神事に参勤奉仕していた。などの点が確認できます。天正年中の賀茂(加茂)惣兵衛と、江戸後期の賀茂(加茂)健司の名が符合していますね。そして古文書の原本は加茂出雲守系統の加茂健司龍起家に伝わったものということがわかります。宛先の一人、左衛門尉が出雲守・加茂健司家の系統の人物かも知れません。

文書の内容もみてみましょう。文面をみると、来る11月に行う神事(二の酉の大祭)から、毎年伶人三名を派遣してもらうよう依頼したもののようです。また派遣に対しては、引物(礼物)を渡すことを約しています。日付は天正4年(1576)4月22日。この日の干支は乙酉、4月の二の酉の日に当たりますから、三嶋大社の恒例大祭が行われたはず。つまりこの文書は、4月の大祭に奉仕した賀茂両氏への書簡で、来る11月の二の酉の大祭への伶人派遣を改めて依頼、確認したものとみられます。また「次の大祭から伶人三名」と、人数を特記している点は、二名であった伶人を三名に増員して欲しいという要請でしょう。増員の理由は書かれませんが、この時代は戦国の争乱の影響もあり、社殿が焼かれたり、神社の組織構成に異動も出ていた時期です。混乱期における必要な人員確保という観点から、派遣伶人の増員を求めたのではないのでしょうか。ともかくも、近世後期の記録で確認できる鶴岡伶人との関わりが、戦国期にも見られることが、この影写文書の重要な点といえます。なお、この伶人派遣の創始については、歴史的な経過を考えると鎌倉幕府との関わりを無視できないと考えていますが、明確な決め手は得られていません。

最後に、この文書は影写されてはいますが、後に史料集に採られた様子もなく、影写が架蔵される研究機関もないようです。原本も散佚したらしく、写しといえど貴重な史料であることを申し添えておきます。

(郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館 学芸員)

三島の歴史とジオポイント・20

あしたか 愛鷹神社

伊豆と駿河を分ける境川が、国道1号と交差する北側左岸の崖縁、三好町12番30号に南面して当社は鎮座します。国道南側の玉川集落の鎮守であり、ご祭神は日本武尊やまとたけるのみことです。

神社周辺では奈良～平安時代の遺跡が確認されており、古くから境川（当地では玉川と呼ぶ）の清流を生活用水とする人々が住んでいました。

神社の由来は不明ですが、平安時代に編纂された延喜式神名帳に記載される「田方郡・玉作水神社」に比定する考えもあります。当社に関する記録は天正18（1590）年の検地帳に神領が記され、延宝7（1679）年再建の棟札が確認されています。東海道分間延絵図（1806年）には「東玉川村・愛鷹明神」として描かれています。

花崗岩製の鳥居（平成4年・夏梅木山売却記念）の右横には、市内の他神社同様に、数百万年前に海底に堆積した火山灰が固まった長岡凝灰岩上部層製の古い鳥居の柱が一对残されています。昭和5年の北伊豆地震で壊れたのでしょうか。

入り口には三島溶岩製の「邑社愛鷹神社」と彫られた神社名碑（明治38年）が建っていますが、側面の「征露戦勝記念」の方が目立ちます。

境内には約2900年前の富士山東斜面の大崩壊で発生した「御殿場泥流」起源の大石が散在しています。参道の右手に自然石を彫り出した安山岩質手水鉢（安永5・1776年奉納）が置かれています。

境内で最も目立つのが拝殿前の花崗岩製の狛犬（平成5年・今上天皇ご成婚記念）で、阿形の雌犬は可愛い子犬を連れています。

本殿の基礎は三島溶岩と長岡凝灰岩上部層をきれいに積んであります。

境内には5基の石燈籠があります。左手前の高い基礎を持つ燈籠は、左側面に大正9年と彫られ、右側面には明治2年と彫られています。他所にあった街燈を移築したものでしょう。全体に長岡凝灰岩上部層製ですが、火袋は平成4年に小室石（伊豆の国市の城山南側石切場から産出した凝灰角礫岩）で作直してあります。

左手奥の長岡凝灰岩上部層製の燈籠は、明和7（1770）年に奉納されています。何度も地震などで倒れたので、全体に傷だらけで火袋は白褐色斑凝灰岩で平成4年に作り直してあります。

右手前の花崗岩製燈籠は平成4年に奉納されています。右手奥の燈籠は中台・竿・基礎は長岡凝灰岩上部層製ですが、宝珠・笠・火袋はデイサイト（酸性安山岩）で作直してあります。奉納時期は明和4（1767）年とも読めます。他の1基は境内の片隅に置かれ、燈籠の形を失っています。

古来より東玉川村の守り神として祀られてきた当社ですが、境界となる玉垣がなく親しみやすく、鎮守の森の樹種も豊富です。今後も大切に保存していただきたいです。

（郷土資料館運営協議会委員・増島淳）



愛鷹神社全景



御殿場泥流起源の大石と手水鉢
右奥に古い鳥居の柱が一对見えます

寄贈・購入資料の紹介

令和2年6月から8月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます（お名前の掲載を希望されない方は、個人等としてあります）。

●寄贈資料

寄 贈 者	資 料 名	点 数
池 谷 博 光 氏	近世古文書（大平柿木村訴訟関係他）、近代古文書（蘭問屋関係・『狩野川改修工事工務報告』・日支事変関係他）、掛軸（東森円通筆阿弥陀名号）、近世古書（俳諧関係・『地方落穂集』他）、近代古書（義太夫関係他）、池谷良仁著『豆州御園村小林氏之歴史』、アルバム（狩野川改修工事事務所関係・昭和20年代後半市街地他）、防楯等	131点
吉 田 泰 次 氏	パソコン（Macintosh SE/30、1989年発売）、ポータブルMDレコーダ（シャープMD-M20、1995年発売）、フロッピー（5インチ・8インチ）、紙テープ（大型コンピュータで使用した紙製記録媒体）	7点
個人（三島市）	前坪（下駄の鼻緒を留める紐、内田神具店・荒物店で購入）	1点
石 井 美 保 子 氏	三島鍛錬馬競走ポスター（昭和17年10月開催、静岡県畜産組合聯合会主催、軍用保護馬による競走会）	1点
三島市立南小学校	近代簿冊（『田方郡訓令并告示』）、古書（『昭和五年静岡県御巡幸記録』・『三周年 三島町震災復興記念写真帖』他、「三島第一尋常高等小学校」蔵書印あり）、レコード（運動会用・校内放送用他）、「三島市南国民学校」校旗、国旗	51点
三島市役所 商工観光課	ドラマ「ごめんね青春！」関連資料（台本・ポスター・出演者サイン色紙他）、ドラマ「僕たちがやりました」関連資料（台本・ポスター・出演者サイン色紙他）、写真・フィルム等（昭和30～50年代に開催された市主催写真コンクール応募作品他）	84点

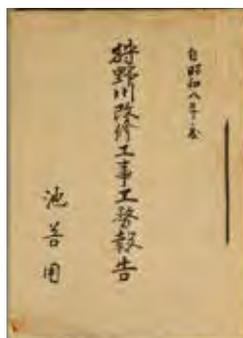
●狩野川改修工事関係資料

池谷博光氏よりの寄贈資料のうち、昭和戦前期に行なわれた狩野川改修工事に関する資料3点について紹介します。

古代以来洪水被害に悩まされてきた狩野川流域で、本格的な改修工事が始まったのは昭和2年（1927年）のことでした。工事は内務省によって行われ、昭和17年度までの16ヶ年を限りとし、工費495万6,935円を費やす計画が立てられました。

池谷氏の寄贈資料には、昭和8～10年度の工務を記録した『狩野川改修工事工務報告』（以下『報告』、写真1）、昭和9年の大平捷水路通水記念式典や工事の様子等を納めたアルバム（写真3）、同時期のものと考えられる「狩野川改修計画平面図」（写真2）がありました。

『報告』には進捗や収支のほか、水位や出水（氾濫）時の被害、雇用の状況等、多岐にわたる情報が詳しく記録されています。事故も少なくなかったようで、昭和8年度には18名、翌9年度には19名の負傷者があり、その大部分は「ナベトロ」（トロッコ軌道）での運搬に従事した際のものとされています。また昭和9年におきた室戸台風の際には、前夜より仮設物・仮橋の保護や用材の避難につとめたとあり、その中、橋上で作業していた1名が水に流されて行方不明になったようです。事実関係のみを記す報告書ではありますが、当時の人々が危険な環境下で必死に工事に従事していた様子を知ることできる資料です。



▲写真1 写真2▶



▲写真3（部分、「ナベトロ積込ノ影」）

博物館実習

- 開催期間 令和2年9月1日(火)～10日(木)のうち8日間
- 参加人数 4名

本年度も学芸員資格の取得を希望される学生の方に対して「博物館実習」の受け入れを実施しました。実習は8日間の日程で実施し、前半は主に館運営や資料の取り扱いについて学び、後半は郷土教室の補助や収蔵庫整理、資料登録等の実習を行いました。また、「採る・捕る・獲る」展の展示作業や西小学校展示室の展示修正の補助にも入ってもらいました。右の写真は資料撮影のレクチャーをしている時のものです。



収蔵美術品紹介

当初計画していた企画展「収蔵美術品展」(8月1日～30日)がコロナ禍の影響で中止となってしまったため、展示予定だったものの中から2点の絵画を紹介します。

●三島にゆかりのある日本画の巨匠 木村圭吾氏の「黎明」

日本画家木村圭吾氏は「たった一人の芸術運動」を提唱し、無所属ながら国際的に幅広く活躍しています。「圭吾桜」「圭吾富士」と称される独創的な作品を数多く生み出している、現代日本画壇において最も活躍している画家のひとりです。当館は木村氏の作品「黎明」を所蔵しています。



●作品データ

作品名：黎明 画家名：木村圭吾
キャンパス：49×72cm 額装：71×93cm

●木村圭吾氏について

1944年 京都府生まれ
中学生の頃より画家を目指す
20代後半より数々の賞を受賞し各地で個展を開催
平成3年に駿河台に拠点を移す
日本画の一大テーマである「桜」の画家として最もよく知られる存在
今もなお、精力的に活動中

●栗原忠二「月島の月」、今後は題名を「月島の夕」に



この作品は作者の母校である三島市立南小学校に長年所蔵され、その後当館に寄贈されたものです。当館では収蔵当初から「月島の月」として管理しており、昭和55年に市の指定文化財に登録された際もこの名称で登録されました。しかし今回、この作品が出品された第12回白馬会絵画展覧会(明治42年開催)の出品目録を確認したところ、出品時には「月島の夕」であったことが判明しました。また、こちらの題名の方が作品の内容とも合っていることから、今後は題名を「月島の夕」と表記することとしました。

郷土教室・体験イベントの報告と予定

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。令和2年8月から10月までに行った事業をご紹介します。(5～7月はコロナ禍により中止)

日程	郷土教室	内 容	参加者
8月19日(水)	江戸時代の三島宿	立版古づくり	22人
9月5日(土)	昔のあそび	ブンブンゴマ作り、こま・けん玉遊び	51人
10月3日(土)	江戸時代の三島宿	三島宿の展示ガイド、立版古づくり	42人



昔のあそび



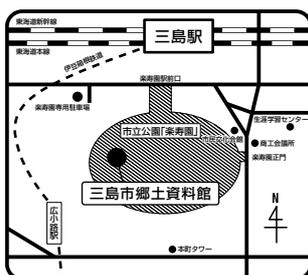
フェイスガード、備品の消毒など新型コロナウイルス感染症対策を実施しています。

これからの郷土教室の予定

日程	郷土教室	内 容
11月7日(土)	楽寿園の自然	ドングリ工作、葉っぱの拓本づくり
11月15日(日)	楽寿園の自然	ドングリ工作、葉っぱの拓本づくり
11月21日(土)	江戸時代の三島宿	立版古づくり、三島宿の展示ガイド
11月23日(月祝)	昔のどうぐ	製麺機でミニチュアうどんを作る、その他昔のどうぐ体験
12月5日(土)	わら細工	わらで正月かざりをつくる ※雨天中止
1月16日(土)	機織り体験	裂き織りの体験、要申込み、(先着順、定員10名、対象:小4以上)
1月23日(土)	リリアン編み	毛糸で干支のウシをつくる ※10:00～12:00 要申込み(12/13まで受付、応募多数時抽選、定員8組、1組3名まで入室可、小3以下保護者同伴)
2月6日(土)	型染め体験	防染の技法を使ってカードをつくる
2月23日(火祝)	遊んで学ぼう富士山デー	富士山の溶岩観察、富士山にちなんだカルタ
3月6日(土)	江戸時代の三島宿	立版古づくり、三島宿の展示ガイド

郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
 TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045
 開館時間 午前9時～午後5時(4月～10月)
 午前9時～午後4時30分(11月～3月)
 休館日 毎週月曜日(祝日のときは翌平日)、
 年末年始
 入館料 無料(ただし楽寿園入園料として別途
 300円がかかります。15歳未満は無料、
 学生は学生証提示にて無料。)



三島駅(南口)から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.43 No.2(第128号)

発行日 令和2年11月1日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

